The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	精霊の実在をめぐる不確定性と非実在性の研究のための一考察 ： ビルマのナッ信仰の場合
Author(s)	山本, 文子
Citation	年報人間科学. 2009, 30, p. 119-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12650
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

精霊の実在をめぐる不確定性と非実在性の研究のための一考察
――ビルマのナッ信仰の場合――

山本　文子

要旨

ビルマにはナッと呼ばれる精霊や神に対する信仰があるとされている。しかし、実際のビルマの人びとの多くは、ナッの実在に対しているかいないかわからないと考えたり（不確定性）、存在しないと考えたりしている（非実在性）。本論文では、ナッの実在に対して不確定、あるいは非実在の立場をとる語りをもとに、従来のナッ信仰の人類学的研究（スパイロの心理学的アプローチ、ナッシュの社会的機能によるアプローチ、田村の象徴論的アプローチ）が想定してきたナッ信仰と、実際のビルマにおけるナッの実在に対する多くの人びとの否定的認識には隔たりがあることを指摘する。この隔たりは、他者の信念の記述可能性を論じた浜本によるコミュニケーション空間という概念から説明できる。浜本によれば、人類学者が他者の慣行Sについて「彼らはSを信じている」と記述するとき、その話者のコミュニケーション空間において、Sが真とみなされないと想定していることを意味する。反対に他者の慣行Pが話者のコミュニケーション空間において真とみなされるとき「彼らはPを知っている」と記述される。精霊の実在の不確定性や非実在性は、「彼らは～を信じている」とは表わされてこなかった、つまり、精霊の実在を信じる人だけが問題化され、そうでない人（精霊の実在を不安定、非実在とする人）が問題化されなかったのは、「信じる」という語に込められていた人類学者の側の認識によると説明できる。

キーワード
ナッ、不確定性、非実在性、信念、コミュニケーション空間

1. はじめに

ビルマには、ナッ（*nat*）と呼ばれる精霊に対する信仰、ナッ信仰があるとされる。ナッは、一般的に不可視とされ、諸々の霊的存在の総称である。ナッ信仰に対する筆者の最初の疑問は、「なぜビルマの人々は、ナッという霊的な存在を信じているのだろうか」というものだった。こうした問題関心のもと、先行研究の読解をすすめ、また自らもビルマへと調査に赴くなかで、筆者は、自分がビルマで得た経験と、実際の先行研究とのあいだに、違和感を感じるようになった。端的に述べると、実際のビルマにおけるナッに対する認識と、これまで研究対象とされてきたものとのあいだにある相違である。実際には、ビルマの人びとのあいだでもナッを信仰しないだけでなく、ナッの存在を信じていないという人が大勢いる。信じていないとは断言できないが、信じているとも断言できない、つまりよくわからないと考えている人もいる(1)。したがって、ビルマのナッ信仰において「なぜビルマの人々は、ナッという霊的な存在を信じているのだろうか」と問うことは、ナッ信仰のひとつの側面しか見ていないことになる。

そこで本論文では、筆者が従来の研究に対して覚えた違和感を、ビルマで得た事例(2)をもとに、可能な限り言語化し、研究対象とされるものと、実際のビルマの現状とが異なるということがなぜ起こるのかを明らかにする。本論文ではとくに、ナッ信仰の人類学的研究のなかでも、「なぜビルマの人々は、ナッという霊的な存在を信じているのだろうか」という問いを正面から取り上げた、あるいはこの問いを考察するのに示唆を与えた以下の三名の研究に焦点を当てる。ひとりは、ナッの実在性とナッに対する信仰を心理学的側面から考察したメルフォード・スパイロ、そしてナッ信仰の存続をナッの社会的機能から考察したジューン・ナッシュ、最後にナッにまつわる神話分析を通して象徴論からのアプローチを試みた田村克己の研究である。事例を下敷きに、従来のアプローチを検証する。そのあと、その違和感を、浜本満による他者の信念を論じたコミュニケーション空間の議論に依拠しながら、理論的側面から考察する。

本論文での結論を先取りするなら、上に挙げたようなナッ信仰の従来の議論は、「ナッの存在を信じ、信仰している人」を分析するためのモデルを提供しているが、そうでない人たちの分析モデルとはならないということである。しかし、実際には、ビルマには「そうでない人たち」、つまりナッの存在を信じていないと言う人や、ナッの存在はいるかいないかわからないと考える人が存在する。なぜ彼らが研究対象にならなかったのかは、人類学における、他者の信念をめぐる記述の問題から考察することができる。民族誌においては他者の慣行について「信じる」とか「信念」という表現が往々に用いられる。こうした表現が含意するところは「知っている」とか「知識」という表現との対比をとおして理解できる。人類学者のコミュニケーション空間において、他者の慣行が理解できない場合、「彼らは〜を信じている」と記述される。理解できる場合「彼らは〜を知

っている」と記述される。「彼らは〜を信じる」とか「彼らは〜という信念を持っている」と言う場合、その話者が「〜」の部分を理解できないと考えていることをあらわしている。ここに、他者の信念において、それを信じる人のみが研究対象とされてきた所以がある。

本論文の構成は以下のとおりである。

第二章では、事例として筆者がビルマで得たデータについて記述する。まずナッについて概説したのち、ビルマにおける事例を提示する。

第三章では、スパイロ、ナッシュ、田村の議論を振り返り、第二章で述べた事例と照らし合わせて、三名のアプローチがビルマの現状には適用できないことを示す。

第四章では、これまでの議論を理論的な側面から考察する。浜本によるコミュニケーション空間の議論を援用し、記述する側である「われわれ」が、信者である「彼ら」をどのように表現していたかが、従来の研究による研究対象の決定と筆者が感じていた違和感を説明することを示す。

2. ビルマでの事例

本章では、まず本論文で問題とするナッについて簡単に説明する。そのあと、ビルマにおける事例を紹介する。ここで取り上げる事例は、ビルマにおいてナッに対する態度が一様ではないことを示している。つまり、その存在を信じ、信仰するという態度だけではなく、ナッの存在を疑ったり、否定したりする態度もごく普通に見られることを示している。事例と従来の研究とを照らし合わせた考察は次章で行う。

2—1. ナッ

本論に入る前に、ビルマのナッ信仰について簡単に述べておきたい。ビルマにはナッと呼ばれる精霊、神が存在すると言われている。ナッという言葉は、そうした存在の総称であり、さまざまな種類の霊的存在を含む。その分類については、研究者の間でも統一されていない。ナッと呼ばれる存在には、自然物に宿る精霊、上座仏教世界観に由来する神々の類、神話上あるいは歴史上の人物の死霊、動物の死霊などがあるとされる。(3)

上座仏教世界観は垂直的なイメージである三十一の世界(4)から成るが、その世界における人間界を基準に人間より上位のナッと人間より下位のナッに分けられる(5)。上位に位置するナッは、適切に慰撫すればわれわれを守護してくれるが、慰撫を怠ったり、無礼を働いたりすると不幸を招くと考えられている。下位に位置するナッは、とくに慰撫の対象とはならないとされている。

ナッにかんする文献を見れば上記のようなナッの分類を知ることができるが、筆者が知る限り、ビルマにおける多くの人びとは、そもそも日常生活においてナッのことを話題にすることはあまりない。また、ナッについて語られる場合でも、どれか特定のナッを想起しているというよりは、霊的存在一般について語られていると考えら

れる(6)。また、ナッの種類や名称をすらすらと挙げることができる人もほとんどいない。また、生活において家を守護するエインザウンナッ（*ein-saun-nat*。ビルマ語で「家」はエイン（*ein*）、「守る」はサウン（*saun*））が慰撫されることがあるが、こうしたナッが人間の上位に位置するからとか、下位に位置する別のナッは慰撫する必要がないなどとはほとんど説明されない。一般的にナッについての語りは個々のナッについてのものではない。また慰撫の対象となるナッとそうでないナッの区別も厳密に行われているわけではない。したがって本論でナッと言う場合、多くのビルマにおける人々にとってそうであるように、ビルマの霊的存在一般を指している。

2―2．事例

以下では、筆者が実際にビルマで聞いたナッに対する認識をあらわした語りを二例挙げる。事例①の女性は仏教徒であり、事例②の男性は、かつては無宗教だったが、現在はナッの存在を信じている。事例①は大学で経済学を教える三十代女性の大学教員ＭＫの語りである。ナッの実在について、まったく自分にはわからないという語る。ナッに対して特別な関心をもっていない。事例②は、かつてはナッの存在を信じていなかったという語りである。事例②は文学を専攻する二十代男性の大学院生Ｎの語りである。かつてナッの存在を信じていなかったが、現在は信じていると語る。

事例①：ナッがいるかいないかわからない

ＭＫとナッについて話していたさい、「あなたはどうか？」と尋ねたところ、笑いながら以下のように話した。

「信仰していないわ（*ma-khokwe-bu*。*khokwe*は「信仰する」）。いるかいないかもわからないし、だからそれが怖いかどうかもわからない。父も母も信仰していなかったから。友人（経済大学の教員で女性）は信仰しているけれど。彼女の場合は、父も母も信仰しているから。伝統だから。」

ＭＫは日本の大学に留学していた経験を持ち、ビルマに帰国後は大学にポストを得て、忙しく働いている。大学教員らしく、上等そうなタメイン（女性用の巻きスカート）と同じ色の上着を着用し、非常に洗練された雰囲気の持ち主である。

ＭＫの口ぶりには、「ナッの実在など、いまのいままで考えたことなどなかった」という思いがあらわれていた。ＭＫの語りからは、ナッを積極的に信じるわけでもなく、積極的に否定するでもなく、存在しようがしまいが知ったことではない、ましてはそんな存在を信仰することもない、という態度が読み取れる。ナッそのものに対する関心が薄く、親のナッに対する態度をそのまま踏襲している。

事例②：昔はナッの存在を信じていなかった

Ｎは、自分と自分の家族、とくに兄について次のように語った。

「兄は大学で化学を専攻しているから、ナッの存在を信じていないよ。兄はパゴダに通うような熱心な仏教徒ではなく、人生で一度しか瞑想をしたことがないぐらいなんだ。そのかわり、酒、たばこは一切しない。それに、彼は未だかつて一度も嘘を付いたことがない。僕自身も幼い頃は、ナッもブッダも何もかも信じていなかったね。父親は作家で、家族全員、父、母、兄二人、自分、姉妹二人がいるのだけど、誰も何の宗教も信じていなかった。でもある時、どこかで化学を教えている大学教授が、ナッガドーに「あなたの前世はある王ですよ」と言われたらしくて。それについて書かれた本を読んでから、ナッのことを信じるようになったな。でも存在は信じるけれど、信仰はしていないな。」

それ以前は、Nの場合、現在はナッの存在を信じているが、かつては信じていなかったと語っている。またN自身だけでなく、Nの兄や、ほかの家族についても、ナッの存在を信じていなかったとしている(7)。兄がナッの存在を信じていなかったことは、弟であるNによれば、「大学で化学を専攻しているから」である。また自分がのちにナッを信じるようになったのは、やはり大学で化学を教える教授が書いたナッについての本を読んだことがきっかけであると説明される。それ以前は、Nとその家族は、「ナッもブッダも何もかも信じていなかった」し、「誰も何の宗教も信じていなかった」。Nの語りからは、ある出来事をきっかけにNの宗教観は変わるが、それ以前は宗教というものすべてに対して、否定的な見方を持っていたと考えることができる。

事例①と②においては、ナッの種類についてまったく関心が払われず、単に「ナッ」とだけ表現されている。またそのようにひとくくりにされたナッの実在に対して、事例①では、不確かなものとして、またその不確かさに対してさえ、無関心であることが示されている。事例②では、きっぱりと存在を信じていなかったことが明言されている。

事例①と②のようにナッを語る人たちは、従来のナッ信仰研究では中心的に取り上げられてこなかった。ここに、筆者が冒頭で述べた違和感がある。なぜ取り上げられてこなかったのだろうか。この問題を第四章で考察するに先立ち、次の第三章では、従来の研究がナッ信仰をどのように説明していたかを振り返り、筆者の感じた違和感をもう少し具体的に見ていきたい。

3. 従来のナッ信仰の説明体系およびその妥当性

本章では、ナッ信仰について心理学的アプローチで説明したメルフォード・スパイロ、社会的機能から説明したジューン・ナッシュ、象徴論的側面から説明した田村克己の議論を概観する。そのあと、二章で取り上げた事例をもとに、これらの議論の妥当性を検証する。

3―1. 三つのアプローチ：心理、社会機能、象徴

まずスパイロのアプローチについてまとめる。スパイロは『ビルマにおける超自然的なものへの信仰（*Burmese Supernaturalism*）』[Spiro 1978(1966)]という本の第五章で、超自然的存在全般を考察の対象として、ビルマの人々がなぜナッのような存在を信じるのか、そしてどのようにしてその信じられた存在に重要性を与えるのかについて、心理的な側面から説明を行った(8)。スパイロの議論は単純化して述べると次のようになる。人が幼児期に獲得する知覚のセットと、宗教とほぼ同義である認知のセットの一致によって、超自然的存在は単なる文化的発明物ではなくなり実在性を獲得する。たとえばスパイロは親子関係を挙げて説明する。先に述べたように、幼少期に子供がその親との間に持つ関係は、個人の知覚のセットを形成するとされる。子供にとって親という存在はいつ怒らせてしまうかわからない存在であり、そのため子供は親が超自然的力を持つと考えるようになる。これが知覚のセットとされる。またビルマ社会におけるナッ信仰（＝認知のセット）においてナッはやはり超自然的力を持つ存在である。したがって、ナッと親は超自然的力を持つという点で共通しており、それはすなわち知覚のセットを認知のセットに投射し、両者が合致したことを意味する。この合致を経て、ナッは信じられるものとみなされる[ibid.:74-75]。実在性を獲得した超自然的存在が人びとにとって重要であると考えられる理由は、人びとがこの超自然的存在に重要性を与えるための動機を持つためである。動機には心理的不安の軽減が挙げられる。そしてスパイロは超自然的存在はビルマの人々の心理的不安を軽減するという機能を果すと論じる。たとえば、ビルマの人々は親をナッだと考えることで、つまりナッを恐れることで、親に対して必要以上の恐怖心を抱いたり、そのため親に対して愛情を持てなくなったりすることが回避されるのである。この動機という心理的要因のために、人びとはナッに対して、たんにその存在を信じるのみならず、重要性を与えると言う。スパイロの主張を言い換えるならば、たとえば子供にとっての親の気まぐれさ、つまり自然的な法則からは予測できないような超自然的な力が、認知のセットであるナッ信仰との合致を通して、ナッとして表現されるようになる。

つぎにナッシュのアプローチについてまとめる。ナッシュは、人びとの社会関係からナッ信仰を考察した論文[Nash 1966]の冒頭で次のように述べている。「今までのナッ研究はナッの起源や歴史的状況を明らかにするものが大半であった。なぜナッ信仰が存続するのか、村や地域の社会構造におけるナッ信仰の意義について誰も研究してこなかった」[ibid.:117]。ここでは「なぜナッ信仰が存続するのか」という問いと「村や地域の社会構造におけるナッ信仰の意義」が並列されている。ここから言えることは、彼女はナッ信仰の存続理由を、社会構造においてナッ信仰がもつ機能に求めていた、ということである。彼女は宗教が人間の関心や社会関係であると考えており、ナッもそれらを表したものであると考えている。たとえば、彼女は社会的単位それぞれに対応するナッがいるとする。地域単位においては、その地域を封土とするナッ、村単位では村を守護するナッ、家族単位では親から子へと継承されるミザインパザインナッ

（*mizaing-hpazaing-nat*。*mi* は「母」、*hpa* は「父」、*zaing* は *hsaing*「関係する」が濁ったものである。直訳すると「母と父と関係するナッ」である）となる。それぞれのナッに対する結びつきの度合いは、人がどの単位においてもっとも密接な関係をもつかによって決まる。ナッシュが調査した村においては、親子間で継承されるナッがもっとも重要視され、丁重な慰撫が必要とされ、そうした慰撫は受け継いだ者の義務とされる。村のナッと個人とのあいだにはそのような直接的な義務はない。しかしミザインパザインナッほどではないが、その村との結び付きは強く、村を離れるときには、かならずお供え物をしなければならない。地域のナッは、ナッシュが言うには、広い地域で名声を得た家や村のナッである。これは、人間の世界における名声がナッの世界における名声をあらわしていることを示している[ibid.: 132]。彼女はこうした人間の世界とナッの世界のパラレルな関係を指摘し、そこにナッの役割を見出す。このナッの役割が、ナッ信仰が存続してきた理由である。

最後に田村のアプローチについてまとめる。田村の研究は、神話分析を通して、象徴論的アプローチからナッ信仰を考察している[田村 1984]。たとえば田村は、タウンビョン二兄弟というナッの伝説について、その諸要素を時の政治を脅かす要因と結びつけながら分析した。神話では、王権を脅かす者（多くは兄弟）は、常に外部から入ってきて、そして社会において他の者と関係を持たず、そのかわりに強い兄弟間の絆で結ばれており、超自然的能力を持つ者として描かれる。そして彼らは最後には王によって滅ぼされるのである。こうした伝説が、王権を脅かす外部に潜む脅威、王権の優位性の誇示を象徴していると田村は論じる。田村の議論において、この場合タウンビョン二兄弟のナッは、政治と結び付けられたときに有意味な存在として認知できることになる。こうした象徴するものと象徴されるものの関係は、それ自体は正しいかもしれない。しかし、こうした解釈を経て、つまり、ナッの超自然的力が王権への脅威を象徴しているからと理解したうえで、ビルマの人びとがナッを信仰しているわけではない。こうした解釈は外部にいる研究者によって与えられたものである。

3―2．妥当性の検討

田村の象徴論的アプローチは、実際にナッを信じるものには隠されているという批判ができるが、スパイロやナッシュのアプローチは、一見してナッ信仰を説明しているように見える。人間の認知セットや知覚のセットから説明するスパイロのアプローチや、社会関係とのアナロジーから説明するナッシュの説明は、とくにナッの存在を信じ、崇拝する人については、説明している。しかし、これらのアプローチが前章で挙げた事例を説明するだろうか。本節では、上にまとめたアプローチのうちスパイロとナッシュの議論を中心的に取り上げ、先に述べた語りを説明するかどうか検証する。

3―2―1．事例①：実在の不確定性

事例①から考察する。事例①は、ナッに対して関心を持たず、ナ

ッの実在についても不確かである。またこうした不確かさ自体について無関心である。ナッはいるかいないかわからない存在であり、また恐れるべきものであるかどうかもわからない存在である（9）。

なぜＭＫにとってのナッは、実在性を獲得していないのだろうか。スパイロはナッが信仰されるまでに二つの段階を想定している。まずある超自然的存在が実在性を獲得するという第一段階があるが、この段階が「信じる」に相当する。その後、その超自然的存在に重要性を付与することで信仰の対象となるので、この段階が「信仰する」に相当する。ＭＫの場合、第二段階の「信仰する」に達していないのは当然であるが、第一段階の「信じる」にも到達していない。つまり、スパイロの議論からＭＫのナッへの態度を説明するならば、彼女には、認知のセットと知覚のセットの一致が起こらなかったと答えることもできるだろう。しかし、なぜ認知のセットと知覚のセットの一致は起こらなかったのだろうか。認知のセットと知覚のセットの一致はどのような場合に起こらないのだろうか。さらに、非実在性の程度にかんする問題がある。ＭＫは、ナッを存在しないものと明言しているわけではない。ＭＫにとって、ナッは存在する可能性もあれば、存在しない可能性もある。つまり、ＭＫにとってのナッは実在性を与えられているわけではないが、実在性が獲得される可能性までもが排除されているわけではない。そうすると、ＭＫにとってのナッの実在性は、どのように説明あるいは表現することができるのだろうか。

実在性の不確定性にかんして、スパイロのアプローチには、以上のような問題が考えられる。ＭＫにとって、ナッの実在性は完全に否定もされていなければ、肯定もされていない。こうした実在の不確定性は、スパイロの議論に即して述べようとしても、うまくいかないことがわかる。肯定も否定もされない実在性は、認知のセットと知覚のセットが完全に一致して実在性が与えられた状態と、認知のセットと知覚のセットが完全に不一致となり実在性が与えられない状態の中間状態ということになる。しかし、どのような一致の程度が中間状態とみなせるのかが理解できない。またそうした一致の過程は心的内部において行われるので、観察によって一致の過程や程度を明らかにすることはできないだろう。したがって、ＭＫのようにナッの実在を不確定とする立場は、スパイロの認知のセットと知覚のセットという議論からは理解することができないと言える。

次に、事例①をもとにナッシュの議論を考察する。ナッシュは、ナッを人間関係を表象するものだと考えた。そうすると、ＭＫの場合は、人間関係や社会関係がナッというかたちで表象されなかったのだろうか。人間関係や社会関係がナッという姿で表象される場合、ナッの実在性やその属性・重要性については、ひとつの社会の内部である程度合意に達していると考えるのが自然である。たとえば村のような社会単位を念頭に置いた場合、ナッをめぐる慣行が行われる必要があると考えられるためには、ナッの実在性や属性・重要性に対して、その社会に属する人たちが、完全に一致するとまでは言わないまでも、ある程度近い認識を持っておく必要がある。では、ナッの実在性やその属性・重要性について、ある人たちにはナッの

実在性が確固としており、慰撫する必要があるような重要な存在だとみなされ、同じ社会に属する別の人たちにとっては、そのようにはみなされないということが、どのような場合に成立するのだろうか。ナッシュの議論からＭＫの語りを説明しようとするならば、このような問いに答える必要が出てくる。また、ＭＫの語りにあるような、いるかいないかわからないナッという認識、またナッの実在性に対する無関心は、ナッが人間関係を拡張したものであるというナッシュの議論とは、かけ離れている。人間関係においては、人間の利害・関心が錯綜しているものである。ナッシュによれば、人間関係において人間に向けられる関心が、ナッへの関心に反映されるとする。このように考えると、ＭＫのようにナッに無関心であるという態度は、ナッシュの議論からは説明できないことになる。

3―2―2．事例②：ナッを信じていなかった

つぎに事例②について、スパイロとナッシュの議論を検証していきたい。事例②は事例①とは異なり、ナッの実在がきっぱりと否定されている（否定されていた）[10]。

Ｎは、過去においてナッの実在を信じていないと断言している。Ｎにとってのナッの非実在性は、スパイロの議論に照らし合わせて考えると認知のセットと知覚のセットの一致が起こらない場合と言えるのだろうか。認知のセットというのは単純化して言えば宗教、この場合ナッ信仰のことを指している。この認知のセットに対して知覚のセットは、幼少期における自分の身の回りの人間との知覚的関係である。ではＮの場合、認知のセットは持っていたが、親子関係においてそれと合致するような知覚のセットを獲得しなかったということなのだろうか。しかしスパイロの説明では、親子関係は個々の家庭の事情によって異なるというよりは、ビルマにおける家庭一般において、同様の親子関係が築かれるということを想定している。そのように考えると、形成される知覚のセットも類似したものになる。したがって、認知のセットと知覚のセットが一致しない場合というの想定しにくい。あるいはＮは、そもそもナッ信仰という認知のセットを持っていなかったという可能性も考えられる。しかし、認知のセットの不在がいったいどのように説明できるのだろうか。つまり、Ｎのような語りを、スパイロの議論の枠組みを用いて、認知のセットと知覚のセットが一致しなかったからナッが実在性を獲得しなかったと説明することはできないのである。

つぎに事例②について、ナッシュの議論の妥当性を検証する。ナッシュの議論は、先述したように、人間関係や社会関係を拡張したものがナッであるというものである。ナッシュの議論をＮに用いるならば、Ｎには人間関係や社会関係がないことになるか、あるいは、Ｎにおいては人間関係や社会関係がナッに投影されなかったということのいずれかになる。人間関係や社会関係がないとことは考えられないので、後者の場合となる。しかしながら、Ｎにとって人間関係や社会関係がナッに投影されなかったということは、いったいどういうことなのだろうか。この問題は、事例①についてナッシュの議論を検証したさいに生じた問題と同じである。

3―3．小括

本章では、ビルマのナッ信仰における人類学的研究の代表的なアプローチであるスパイロの心理学的アプローチ、ナッシュの社会機能からのアプローチ、田村の象徴論的アプローチの研究を概観した。そのうち、田村の象徴論的アプローチは、事例と照らし合わせる以前に、何が何を象徴しているかという解釈そのものが、外部から与えられたものにすぎないことを指摘した。このような解釈過程を経て、人びとがナッの存在を信じ、信仰しているわけではない。このことから、象徴論的アプローチは、ビルマの人びと自身が、どのようにナッの存在を信じ、信仰するようになっているかという問いには答えていない。したがって、ナッの存在に対して懐疑心を示したり、それ自体をきっぱりと否定するような事例①②をもとに、その妥当性を検証することはしていない。ゆえに本章ではスパイロとナッシュのアプローチについて、事例①②をもとにその妥当性を検証している。

第二章で示した二つの事例は、以下の特徴を持っている。事例①ではナッの実在が不確かであるという認識、またそうした不確かさに対する無関心が示されている。事例②ではナッの実在がきっぱりと否定されている。前節でこれら二つの事例をもとに、スパイロとナッシュのアプローチについて考察した。どちらのアプローチにしても、事例に適用しようとすると、奇妙な帰結を導いてしまうことがわかった。

たとえば、事例①のナッの実在の不確定性について言えば、スパイロのアプローチから説明しようとしたさい、認知のセットと知覚のセットが完全に一致する場合と、完全に一致しないあいだの中間形態を想定しなければならないことである。ナッシュのアプローチにおいては、ある社会組織において人間関係がナッ投影される場合と投影されない場合の差異を説明しなければならない。また人間関係における関心が、人間のナッに対する関心であるなら、人間関係にのみ関心をもち、ナッに対しては無関心ということは理屈に合わない。

事例②のナッの実在を完全に否定する立場についても、スパイロとナッシュの議論が導く不可解な帰結について簡単にまとめておく。スパイロのアプローチでは、認知のセットと知覚のセットがビルマにおいて普遍性を持って一致することが想定されている。したがって、これらのセットが一致しない場合、なにに原因を求めてよいかが不明である。ナッシュのアプローチについては、事例①で生じた問題と同様の問題が挙げられる。人間関係や社会関係から完全に切り離された個人は想定しがたいにもかかわらず、同時に人間関係や社会関係が投影されるはずのナッが実在性を持たない場合を想定しなければならないことになる。

以上の議論から、スパイロにしてもナッシュにしても、議論の出発点にナッという存在が信じられ、人はナッを信仰・崇拝しているという現象が据えられているということが言えないだろうか。この現象を出発点として、なぜビルマの人びとは、ナッの存在を信じ、また信仰しているのだろうかと問うているのである。つまり、どち

らのアプローチも、ナッの存在を信じ、信仰している人を説明するモデルとして編み出されたものである。

しかし、事例①②で見たように、ナッの存在は常に信じられ、また信仰されているわけではない。またビルマの人々は、常にナッの存在を信じ、信仰しているわけではない。ナッの実在は不確定性をもって語られることもあれば、実在がはっきりと否定される場合もある。本章での検証により、これまでの研究では、「存在自体が不確かなナッ」や「存在しないナッ」およびこうしたナッ認識をもつ人びとが考慮に入れられてこなかったと言うことができる。ではなぜこれらはナッ信仰を研究するさいに考慮に入れられてこなかったのだろうか。

4. 理論的考察：人類学における「信念」

第三章では、筆者が集めた語りをもとに従来の研究の妥当性を検証した。その結果、スパイロの心理学的アプローチやナッシュの社会機能的な説明においては、「存在自体が不確かなナッ」や「存在しないナッ」およびこうしたナッ認識をもつ人びとが考慮に入れられてこなかったことがわかった。

ではなぜ従来の研究は「信じられかつ信仰されているナッ」と「ナッの存在を信じ、また信仰する人」だけに焦点を当て、「ナッの存在を信じていない人」や「ナッの存在を不確定だと考える人」を問題化してこなかったのだろうか。この問いに対して、他者の慣行や考え方に対して、「信じる」とか「信念」という語を用いて表現すること、あるいは人類学者がそれらをとくに問題化するということは、具体的にどういうことなのだろうかという側面からアプローチしたい。この問いは、すなわち、なぜわれわれはそうするのかという、われわれ自身の問いである。この問いを考察するさい、他者の信念が記述可能であるかを論じた人類学者の浜本満の議論[浜本 2007]が参考になる（11）。

浜本は「信じる」という語が目的語に命題をとる場合、それは話者のコミュニケーション空間において異論が存在することを示すものであると考える。浜本は次のように言う。

> 「「SはPを信じている」はSがPに真という評価をあたえ、かつ話者が自分が所属する言説空間においてPを真と評価しない立場が存在すると判断しているというのと等価である。[…]「SはPを知っている」はSがPに真という評価をあたえ、かつ話者が自分の所属する言説空間においてPを真と評価しない立場を見出さないということと等価である。」[ibid.: 65-66]

たとえばある人類学者が「ビルマの人びと（S）はナッが存在するということ（P）を信じている」という文章を書く場合について考えてみよう。ビルマの人びと（S）はナッが存在するということ（P）に対して真という評価を与えており、同時に話者であるその人類学者は、自分の所属する言説空間においてナッが存在するということ

（P）を真と評価しない立場が存在すると判断しているのである。つまり、「彼らはPを信じる」とか「彼らはPという信念をもっている」という表現は、話者が自分の言説空間においてPが真と見なされない可能性があると考えていることを意味しているのである。それは浜本が言うように、「SはPを知っている」という記述と比較するとわかりやすい。たとえば浜本が例として挙げている「地球が丸い」といった命題の場合がそうである。ビルマの人びとのコミュニケーション空間においてもこの命題は真と評価されるだろうし、調査者である話者のコミュニケーション空間においても真だと評価されるので、「ビルマの人びとは地球が丸いということを知っている」と記述される。

浜本の議論では、「信じる」とか「信念」という語は、目的語にかんして、その話者のコミュニケーション空間における異論が想定される場合に用いられるものである。目的語は命題の形が想定されているが、たとえば「彼らはナッを信じている」という文章においては「信じている」の目的語である「ナッ」は「ナッが存在する」という形で命題の形で言い換えることができる。

以上の議論から、他者の慣行や考えに対して「信じる」[12]とか「信念」という語を用いて表現すること、またとくにそれらを問題化することの意味が明らかになる。つまり、そうした表現や問題化は他者の慣行や考え方について、われわれがわれわれのコミュニケーション空間において異論の想定されるものであると見なしているということである。ある慣行や考え方について、われわれのコミュニケーション空間において異論が想定されることは、それらがわれわれにとって不可解であることを意味するからである。ここに「われわれ」と「彼ら」のあいだの非対称性を指摘することができる[13]。

またこのことから、「信じる」とか「信念」という語で表現されない慣行、考え方は不可解とは見なされず、説明の対象とはならなかったことがわかる。ここにナッを信じ、信仰する人だけが問題化され、ナッの実在を不確定だと考える人や否定する人が問題化されなった由来を見ることができる。これまで後者について、「彼らはナッが存在しないという信念をもっている」とか「彼らはナッが存在しないかもしれないと信じている」とは表現されてこなかった。問題化されたのは、「ナッを信じたり信仰したりする人」だけであった。反対に、「ビルマにおいてナッの存在を信じていない人」、「ナッが存在するかどうか自分では判断できない人」、「ナッの存在を信じてはいるが信仰はしていない人」は問題化されずに放置された。まとめると、信者である「ナッを信じ信仰する人」は問題化され、信者でない「ナッの存在を信じない人」「ナッが存在するかどうか自分では判断できない人」、「ナッの存在を信じてはいるが信仰はしていない人」が問題化されなかったということは、「われわれ」による「彼ら」に対する一方的な特徴づけ、つまり「信じる」や「信念」という語にあらわれている非対称性に由来することが理解できる。

5. おわりに

筆者が、ナッ信仰にかんする従来の研究とビルマにおける現状とのあいだに感じた違和感は、従来の分析モデルが問題設定の出発点に想定している前提から生じていると言える。つまり、人びとについてはナッを信じ、かつ信仰することということが前提とされ、ナッについては信じられ、かつ信仰されるということが前提とされていた。

しかし、現実のビルマ社会において、人びとはナッの存在を疑うこともあれば、存在自体を否定する場合もある。ナッについて言えば、信じられるほどの実在性をつねに持つわけではなく、その実在性は不確かなときもあれば、非実在的であるときもある。そしてナッに対する人びとのこうした態度は、ビルマにおいて広く見られるものである。このような人びとの態度やナッの在り方をも問う必要があると筆者は考えている。

[注]

（1）従来の研究でナッ信仰が論じられるさい、往々にして上座仏教の世界観との対比がなされるが、実際には仏教徒以外のキリスト教徒にあってもナッの存在を信じ、また恐れおののく人たちがいる。これまでこうした事実も、大きく取り上げられることがなかった。仏教徒以外のナッ認識という点でも、従来の研究の不十分さが浮き彫りになるが、本論文では詳しく論じることができないので、このテーマについては別の機会に論じたい。

（2）本論文で用いる事例は、二〇〇六年度大阪大学大学院「魅力ある大学院教育」イニシアティヴによるフィールドワーク支援基金の助成を受け、二〇〇七年一月から約一ヵ月間ヤンゴンにて行ったフィールドワークにもとづくものである。

（3）ナッの種類については[Htiing Aung 1933]、[Nash 1966]、[Spiro 1978(1966)]、[田村 1987, 1988]を参考にした。

（4）「三十一の世界」とは生物がそこにおいて輪廻転生を繰り返すとされている世界である。詳しくは[原田 1997]を参照。

（5）人間界を基準とした上位のナッと下位のナッの分類についても、研究者の間で意見が分かれている。仏教世界観に由来する神々が上位のナッ、自然物に宿るナッや動物の死霊が下位のナッである点はおおむね共通しているが、神話上あるいは歴史上の人物の死霊については、テインアウンのみ上位のナッに分類し、ナッシュ、スパイロ、田村は下位のナッとしている。

（6）ただし、ナッを憑依させることができるとされる職業的霊媒ナッガドー（*nat-kadaw*）やその弟子および熱心な信者らの会話においては、とくに神話上あるいは歴史上の人物の死霊にかんして詳細な語りが聞かれる。たとえばナッガドーは儀礼において、いろいろなナッを憑依させるが、そのさいナッごとに衣装を替えるために控え室に戻る。また踊りの内容も、酒好きのナッなら酒瓶を用いるなど、そのナッ特有である。ビルマにおいてナッ信仰に積極的に関わる者は少数派であり、大多数の人は普段はナッのことを話題にしていない。しかし後で述べるエインザウンナッなどは多くの人が慰撫する家の守り神として考

えられている。

（7）Ｎ以外の家族のメンバーが、Ｎ同様に、語りに出てきた本をきっかけにナッの存在を信じるようになったかは不明である。しかし、家族のメンバーについてもＮは「誰も何の宗教も信じていなかった」というように過去形で語っている。また、本論文では、ナッの実在に対する否定的態度の事例としてＮの語りを取り上げたが、Ｎの語りは以下の点で示唆に富んでいる。Ｎは「過去においてナッの実在を信じていなかった」と語っており、語りのなかで、ナッの実在に対する立場に劇的な変化が生じたことが述べられている。ある存在の実在性がひとりの人間において変化し、それが自覚されている例と考えられる。

（8）スパイロは文化の可変性にもかかわらず、それぞれの文化の担い手というのは、全人類的な心理的性格（psychic unity of mankind）によって特徴付けられるものである、という立場を表明している[Spiro 1978(1967): xxvi]

（9）ＭＫは大学で経済学を教えている。経済学的な知識や合理的なものの考え方が、彼女のナッの実在に対する態度を決定する要因のひとつであるとも考えられるだろう。しかし現段階で、筆者には合理的な知識が宗教的知識に対してどのような意味をもつかを論じる用意ができていない。また本論文においてＭＫの事例は、ナッの実在性が不安定であると語られる事例として取り上げている。どのような人が、ＭＫと似たようなナッ認識を持つかというのは本論文の主旨ではない。

（10）Ｎの兄がナッの実在を信じていなかったことについて、Ｎによる「大学で化学を専攻しているから」という説明は、本論文では中心的に取り上げない。ＭＫにかんしては、経済学を教えているということが、自分のナッに対する態度を説明するさいに用いられていない。Ｎの兄の場合は、Ｎによって、「化学を専攻」していることがナッの実在を信じていないことの原因だと説明されている。Ｎ自身がナッの実在を信じないことと「大学で化学を専攻」していることを結びつけて解釈している点は注目すべきである。しかし、注（9）で述べたように、科学的知識がいかに宗教的知識と関係しているかについては、筆者にその議論をする準備ができていない。筆者のインフォーマントには、大学で物理学を専攻していたというナッガドーもおり、こうした事例からも、科学と宗教における知の在り方は今後論ずべきテーマのひとつである。

（11）人類学において最初に信念を問題化したのは、一九七二年に『信念、言語、経験（*Belief, Language and Experience*）』[Needham 1972]を出版したロドニー・ニーダムであろう。本論文でニーダムを取り上げなったのには理由がある。まずニーダムの論考について要約すると以下のようになる。ニーダムの論考は、夢の中で"I believe in God."という文章を、自分の調査地の言語であるペナン語で言い換えようとしたさい、うまく表現できず思わず飛び起きてしまったという自分の経験から出発している。彼は、これまで民族誌家はあまりに無反省に信念（belief）という語を用いてきたと言い、これら民族誌家には英語で示される心理的な状態を全人類に帰することができるという前提があったとする。そして「信念（belief）という心的状態」を人間に不変なものとして想定できるのか、そして他者の信仰に対してこの語を使用することができるのかについて議論を展開する。belief という英語の語源を遡ったり（第四章）、哲学者の議論を参照したり（第五章）、belief が belief たりえる基準を探したりするが（第六章）、最終的には

英語であらわされる心的状態である belief のような語は、既存の言葉で表わせない概念であり、言語自体が抱える不安定性や不確実性という理由によっても、人類学者が調査対象にするような人たちに応用可能な分析概念としては機能しないという結論を下す。そもそも浜本[2007]は、ニーダムが主張するように信念は本当に心的状態なのかという問いから出発しており、「信じる」という表現の用いられ方から議論を展開する中で、信念は心的状態ではないという結論に達したのである。

しかしながら、本論文において中心的な問題となっているのは信念(belief)が心的状態か否か、記述可能か否かではない。心的状態ではないことを前提として、「われわれ」が「彼ら」の慣行や考え方に対して「信じる」や「信念」という語を用いることがなにを意味しているのかということである。つまり「われわれ」と「彼ら」の関係性とそれにもとづく方法論そのものを問題化しようとしているのである。以上の理由から、本論ではニーダムの議論を取り上げなかった。

（12）日本語による民族誌的記述における「信じる」という語への無反省な態度は、「信仰する」という動詞との区別のあいまいさを招いた要因のひとつと考えられる。「信じる」という語が具体的に何をあらわすかを明示しないまま「彼らはナッを信じる」と表現した場合、それは「彼らはナッという存在を信じる」とも「彼らはナッを信仰する」ともとれるからである。

（13）浜本の議論に近い議論として科学哲学者のブルーノ・ラトゥールの議論が挙げられる[ラトゥール 2007(1999); 2007]。ラトゥールは『科学が作られるとき――人類学的考察』の第五章「理性の法廷」で合理性をめぐる信念と知識についての議論を展開している[ラトゥール 2007(1999): ch. 5]。彼は科学者、実験室、企業などのアクターの諸実践から形成されるネットワークという概念を用いて科学的知識が作られる過程を描いた。こうしたアクターの数が増えれば増えるだけ、科学的知識は強固なものとなる。そうした科学的知識を作る一端を担う科学者というのは、ネットワークの内側に存在することになる。そして彼は、ネットワークの内側と外側という観点から、信念という表現がなにを意味するか明らかにしようとする。ラトゥールによれば、ネットワークの内側で作られた科学的知識は正当であるのに対し、そうでない外側の考えは正当でないとされ、信念と表現される。つまり、信念という表現は、ネットワークの内側の人間によるネットワークの外側の人間に対する特徴付けと深くかかわっていることになる。

浜本の議論との相違点は、ラトゥールが他者に対する「信念」という語を、他者の非合理性に対する告発と考えている点である。他者の世界もわれわれの世界もネットワーク状に構成されている点で、同質であり、その意味でわれわれは近代的であったことなどなく[Latour 1993]、したがってわれわれには非合理的な彼らに対して「信念」の語で告発する権利などないとする。

一方浜本は、「信じる」とか「信念」という語が心的状態をあらわすものではないことを明らかにし、民族誌において、「彼らが～を信じている」という表現を用いることが可能であるとした。

現段階では、両者の方向性の相違について詳しく論じることはできないが、こうした議論にもとづく両者の方法論や問題点については今後十分に吟味する必要があるだろう。

［参照文献］
田村克己 1984「ビルマのナッ信仰」青木保編『現代のエスプリ４象徴人類学』、至文堂、pp. 153-164。
――――1987「ビルマの精霊信仰再考序説」『鹿児島大学教養部史録』第十九号 pp. 39-53。
――――1988 「「物」と「霊」」伊藤幹治、米山俊直編『文化人類学へのアプローチ』、ミネルヴァ書房、pp. 231-262。
浜本満 2007「他者の信念を記述すること：人類学における一つの擬似問題とその解消試案」『九州大学大学院教育学研究紀要 第九号（通巻第五十二集）』、pp. 53-70。
原田正美 1997「須弥山世界――神通力と輪廻転生」フジタ・ヴァンテ編、奥平龍二監修、『ミャンマー――慈しみの文化と伝統』、東京美術、pp. 138-152。
ラトゥール、ブルーノ 2007(1999)『科学が作られているとき――人類学的考察』、産業図書。
――――2007『科学論の実在――パンドラの希望』、産業図書。
Htiing Aung Maung 1933 “Some Inferior Burmese Spirits.” *Man*, 33: 61-62.
Latour, Bruno 1993 *We Have Never Been Modern*. translated by Catherine Porter. Harvard University Press.
Nash, June 1966 “Living with Nats: An Analysis of Animism in Burman Village Social Relations.” *Anthropological Studies in Theravada Buddhism*. Cultural Report Series NO. 13: 117-136, Yale University Southeast Asia Studies.
Needham, Rodney 1972 *Belief, Language and Experience*. Oxford: Basil Blackwell.
Spiro, Melford, E 1978(1967) *Burmese Supernaturalism, with a new introduction by the author*, Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.

A Study for Unstableness and Nonexistence of Spirit: a case of Nat Worship in Burma

Ayako Yamamoto

Conventional studies about Nat worship said people in Burma believed in and worship Nat. However most of the people in Burma aren't sure of or deny the very existence of Nat. Firstly This paper points out the gap between the recognition toward Nat worship that conventional studies have treated and assumed and one that people in Burma usually have. In this paper I examined three conventional arguments, that is, psychological analysis by Spiro, analysis from social function by Nash, symbolical analysis by Tamura. We can understand this gap from the idea of communication space by Hamamoto, a Japanese anthropologist, who studies possibility of description of other's belief in anthropological studies. Hamamoto argued that a description by an anthroplogist 'They believe S." means that he or she judges S won't be recognized as true in communication space in which he or she belongs to. On the contrary an anthropologist describe other's practice as "They know P." when he or she judges P will be recognized as true in communication space in which the speaker belongs to. From this argument, returning to the unstableness and nonexistence of Spirit, anthropologists haven't described such recognition as belief. Practices described as belief are supposed to be questioned because of the nature of incomprehensibleness. That explains why anthropologists have treated only people who believe in and worship Nat and ignore people who regard Nat as something unstable or nonexistence.

Keyword: Nat, unstableness, nonexistence, belief, the communication space